



TITLE:

<批評・紹介>河田悌一著 中國近代
思想と現代

AUTHOR(S):

佐藤, 愼一

CITATION:

佐藤, 愼一. <批評・紹介>河田悌一著 中國近代思想と現代. 東洋史研究
1988, 46(4): 830-836

ISSUE DATE:

1988-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154217>

RIGHT:

- (6) 越智重明氏「白衣領職をめぐる」、『小尾博士古稀記念中國學論集』(一九八三)は、著者を批判しつつ除名と免官の同質性を強調するが、その相違點が不明確である。その後、著者の反論が、「晉南朝における律令と身分制」『律令制——中國朝鮮の法と國家』(一九八六)においてなされたけれども、本文にのべた疑問點は解決されていない。

- (7) 著者には、ほかに「南京出土六朝墓に關する二三の問題」『人文研究』三四—二(一九八二)がある。

- (8) 「東晉南朝の公田」『東海史學』二二(一九八六)。

- (9) 「僑州郡縣制と土斷」『中國貴族制社會の研究』(一九八七)。

〔附記〕

本稿は、一九八七年十一月四日の中國中世史研究會での發表をもとに成稿したものである。席上御教示をいただいた著者の中村圭爾先生はじめ諸先生方に末尾ながら感謝の意を表しておきたい。

一九八七年二月 東京 風間書房
A5版五四四頁 一五五〇〇圓

河田悌一著

中國近代思想と現代

佐藤 愼 一

河田悌一著『中國近代思想と現代——知的狀況を考える』(研文出版、本文三三三頁・索引十五頁、一九八七年)には、長短二十六篇もの論文が収められています。清代初期から中華人民共和國成立までの約三百年間の思想史をコンパクトに概観した、「中國近代における思想の流れ」と題する論文が序章に置かれ、續く二十五篇の論文は四部に分けて配列されています。第一部には、近代中國における兒童觀の變遷を扱う「近代中國における子ども」と、毛澤東の孫子觀に觸れた「毛澤東と『孫子』という二本のエッセイ」が配列されています。(第一部には「子ども・毛澤東・孫子」という三題揃めいた題名がつけられていて、三者の相互關連をどう讀み解くべきか色々考えてみました、よく分かりません)。第二部は「章炳麟と孫文」と題されていて、ここには河田さんの主要學術論文である「否定の思想家・章炳麟」を始め、現代中國における章炳麟と孫文の研究狀況を紹介する數篇の論文が収められています。第三部は「新しい知的狀況」と題されていますが、ここに収められた六本の論文では、文化大革命以後の急速に變貌しつつある中國において、研究者がいかなる「政治的」問題を抱えて知的活動を展開しているかが、多くの場合河田さんの實見に基づいて分析されています。本書の副題が「知的狀況を考える」ですから、第三部は本書で最も重

要な部分なのでしょう。最後の第四部の題名は「學術研究の動向」ですが、ここでは中國における中國研究と、アメリカにおける中國研究とが取り上げられています。前者については、一九七三年から一九八五年に至る時期の研究の動向が、一年ないし數年の時間の幅で、「定點觀測」されています。後者については、河田さんがかつて留學したイェール大學における中國學の研究・教育を中心に、アメリカの中國研究の現状が詳細に紹介されています。以上が、本書の構成の概略です。

一見して明らかなように、本書に收められた論文・エッセイは、多様多岐にわたります。巻頭の「中國近代における思想の流れ」は、初學者にとって中國近代思想史への格好の手引きですし、巻末に收められたイェール大學ジョナサン・スペンス教授の講義のリーディング・リストは、中國研究の専門家にとって大きな刺激となるはずです。ですから、譬えて言えば、本書は總合衣料デパートのようなものです。衣料（近現代中國思想）を扱うという點では共通しているのですが、各階（各部）ごとに取り扱う商品が異なり、しかも大衆向けバーゲン・セールの會場から高級ブティックまで同じ建物に同居しています。これは本書の魅力の一つです。讀者はデパートの中を氣ままに歩き、自分の關心に合わせて商品を選ぶことができます。扱う商品は多様ですから、きつとどこかで好みの商品にぶつかるとでしょう。しかも河田さんの文章は、文體は平易で論旨は明快ですから、ショッピングに疲れるということはありません。

しかしこの本書の魅力が、同時にそのまま本書の弱點にもなっています。つまり、書物としての主題が不鮮明なのです。本書に收められた二十六篇の文章は、いずれも既發表のもので、特に本書のた

めに書き下されたものではありません。しかも、元來の發表の時期も場所も様々で、想定讀者も異なります。こうした性格の異なる文章を集めて一冊の書物に編む時、編集という作業が極めて重い意味を持つことは、言うまでもありません。私は何度も本書を読み直したのですが、本書の編集の意圖をついに理解することが出来ませんでした。

もしも私が編集者であれば、私は次の二つのうちのどちらかを選択したでしょう。一つの場合は、「序説」として收められた「中國近代における思想の流れ」を前面に押し出すという選擇です。この論文は僅か三十三頁の短い文章ですが、前述したように、清代初期から中華人民共和國成立に至る約三百年の思想の流れが凝縮されています。紙幅の制約から、ほんの要點しか記述されていませんが、そこに河田さんの中國近代思想史の構想を見とれることは十分に可能です。もしも十分な枚数が與えられたら、そこに河田さんの創見を加えて、明末清初から中華人民共和國成立に至る壯大な思想史概説に發展するはずの萌芽が、ここには存在します。そして現在我々の前になく、出現が切望されているのは、まさにそのような大きな構想を持った思想史概説なのです。このような思想史を書ける人材は、現實には決して多くありません。研究の分業化が進んでいる現状では、清代思想史の専門家やアヘン戦争以降の思想史の専門家はいても、雙方に目配りのきく研究者はむしろ例外的で、清朝考證學の研究を狭義の専門とし、章炳麟や陳獨秀についても業績を持つ河田さんは、その數少ない例外の一人です。私が編集者であれば、「中國近代における思想の流れ」を基に、河田さんを脅し、すかし、なだめ、一冊の本格的な中國近代思想史概説の出版を目指した

でしょう。

もう一つの選擇は、これと對照的に、現代中國の學問狀況・思想狀況の分析を主題とする第三部・第四部を前面に押し出すという選擇です。本書のこの部分には、多くの貴重な學術情報が含まれています。私自身、澤山のことをここから學びました。しかし、ここに收められた論文は、一年ないし數年という限られた時間の幅の中の中國の學術動向を、それぞれの時點で分析した、いわば時評的 성격の文章です。こうした文章を原型のまま再録することは、激動する中國學術を前にした日本人中國研究者の證言を後世に傳えるという點では、もちろん意味のあることです。とはいえこうして一冊の書を編むからには、それにつけ加える形で、現在の時點での河田さんの總括的回顧がなされて然るべきではないでしょうか。恐らくそうした總括的回顧は、學術という限定された視角から捉えたものではあれ、文革から現在に至る十五年の混沌とした思想狀況を整理する、一箇の思想史としての性格を持つことになるはずです。このような思想史もまた、現在我々の前になく、出現が待望されているものなのです。私が編集者であれば、ここでも河田さんを脅し、すかし、なだめ、そのような總括的回顧を是非とも書いてもらい、それを軸に一冊の書物を編んだでしょう。そのようにすることこそ、「知的狀況を考える」という本書の副題にふさわしい選擇ではないでしょうか。

これら二つの選擇肢は、相互に獨立した選擇肢であると、私は考えます。言い換えれば、本來二冊の大著に發展すべき萌芽としての貴重な素材を、萌芽のままに一冊の書物に投げ込み、結果的に書物としての主題が不鮮明になってしまったのが、本書の弱點であると

私は考えます。私の考えは、編集者の立場からすれば、ないものねだりの餘りに無理な注文と映るかもしれません。確かに、假に私が河田さんの立場に置かれたとして、いかに編集者に脅され、すかさず、なだめられたとしても、そう簡単に現代中國學術の總括的回顧や近代中國思想史概説の執筆を引き受けるわけにはいかないでしょう。そのことは百も承知の上で言うのですが、そこを何とかするのが編集者であり、書物の編集・出版という仕事を通して文化の創造に貢獻するためには、どうしてもぐらなくてはならない難關なのではないでしょうか。

編集者に對する注文や疑問ばかり書きつらねましたが、もちろん著者にたいする注文や疑問もあります。特にそれを感じるのは、中國の「知的狀況」を扱う第三部と第四部に關してです。結論から言えば、「知的狀況」を捉える河田さんの視角が、私には十分納得できないのです。例えば河田さんは次のように書いています。

「周知のように、傳統的に中國では、學術は政治と密接に結びついたものとして存在してきた。のみならず、社會主義體制の中國になつてから、學術の存在は、よりいっそうつよく政治の支配をうけるようになってきた。たとえばそれは、四人組時代にはげしく鼓吹された孔子批判——批林批孔運動、儒法鬭爭史などをみれば、すぐに理解されえよう。學術は政治に服従するしもべであつたのだ。したがって中國における學術の動向こそ、中國の政治狀況をうらなう、ひとつの強力なリトマス試験紙だといつても、けつして過言ではないのである。」（二四七頁）

類似の表現は第三部と第四部に收められた文章の至るところに現れ、恐らくこの「政治と學術」という軸こそ、河田さんが現代中國

の知的状況を分析する際の最も基本的な枠組だと思われれます。そして、私が十分納得できないというのは、まさにこの枠組に關してなのです。

第一の疑問は、こうした枠組で果たして中國の學術状況や政治状況が解明できるのか、という疑問です。確かに、例えば河田さんが「洋務運動と現代中國」(第三部)で力説しているように、中國が現代化政策や對外開放政策を採用したことに伴って、學術界における洋務運動評價が、政策の進展と波長を合わせて、しかも政策を正統化する方向で、從來の洋務運動評價と一變したこと、あるいは一變した主張を唱える學者が増えたことは、紛れもない事實です。これを以て河田さんのように「學術は政治に服従するしもべ」と斷定することは不可能ではないし、私も感情的には十分同感できます。しかし問題は、そう斷定することによって知的に何が見えてくるのか、ということではないでしょうか。つまり、そのような前提で學術の動向を検討すれば、結局のところ、政治の世界で起こっている變化とバラレる變化を學術の世界で確認して終わる、ということになってしまいかねないのです。これは一種の循環論です。つまり、現代中國においては政治が學術を支配するという前提に立つて、しかも政治の世界で起こっている變化を所與として學術界を見れば、類似的變化を學術界に見出すことは恐らく容易です。それは確かに前提の正しさを再確認することにはなるかもしれませんが、それ以上の新たな発見は、政治の世界に關しても、あるいは學術の世界に關しても、生まれてこないのではないかと私は考えます。

政治の世界は、あくまで政治の世界の固有の論理に従って動くというのが私の考えです。もしも學術の世界が政治の世界と思想的に

意味のある關連を持つ瞬間が現代中國においてあるとしたら、それはあたかも河田さんの見方とは逆に、政治の世界の發する要求に學術の世界が應じきれなくなる時ではないでしょうか。例えば河田さんも再三指摘しているように、中國は「四つの堅持」を標榜しつつ現代化を目標とした改革を推進しています。「四つの堅持」は少なくとも中國共產黨の一黨獨裁體制を正當化するためには不可欠ですが、そのことと大規模な改革との整合性を保つためにマルクス主義や毛澤東思想の再解釋が行われていることは周知の通りです。ここまでは、河田さんの言う「政治の學術に對する支配」で説明がつきます。しかし眞の問題は、學術の世界がそのような要求に應じきれなくなった時、つまりマルクス主義や毛澤東思想の再解釋ではもはや中國の必要とする改革を正當化できないと學者が判斷する時、あるいは進んで、中國の改革を進めるためにはブルジョアスティクな體制こそ望ましいと學者が學問的に判斷する時、更に進んで、中國の改革を進めるためには、學問の政治からの獨立が必要であると學者が判斷する時、出現するのではないのでしょうか。その時こそ、政治の世界の動向を左右するような大きな意味を學術の世界が持つと、私は考えます。河田さんの言うように、現代中國において學術は政治の動向をうらなうリトマス試験紙です。しかし、酸性の溶液に青色試験紙を入れても、赤くなることはいわば必然です。むしろ酸性溶液に敢えて赤色試験紙を入れて、いつ青くなるかを見守る方が、現代中國の知的状況と政治状況を考察する上では意味があるように、私には思われるのです。

第二の疑問は、政治はどこまで學術を支配できるかという疑問で、これはある程度まで第一の疑問と關連します。政治が學術を支

配するという関係は、別に中國に限らず、社會主義國に廣く見られる現象であり、更に一般化して言えば、政治權力が眞理價值を獨占する體制では常に見られる現象です。戰爭中の日本においても、この現象は存在しました。しかし、政治は果たして學術を全面的に支配することが出来るのでしょうか。例えば日本の戰爭中を例にとれば、花田清輝は「奴隸の言葉」を騙使して自らの思想を語っていたわけですし、あるいは學術をもっと狭い意味にとったとしても、丸山眞男や大塚久雄は象牙の塔に「國內亡命」しつつ、最も深い意味での體制の支配に抵抗する文章を、まさに學術のチームでつづっていたわけです。そのように最も不自由な戰時體制下で蓄積された思想の準備を抜きにしては、戦後の思想状況を正確に理解することはできないでしょう。いかに強力な政治權力であっても、研究者の内面までを完全に支配することは出来ません。同じことは中國についても言えるのではないのでしょうか。確かに河田さんの指摘するように、現在でも中國の學術界では、政府の政策に學問のレベルで同調しようという傾向が、大量觀察的現象としては明らかに存在します。しかしそれは中國の研究者の本心でしょうか。もちろん、イエスともノーとも一概には言えないでしょう。しかし、政治權力が眞理を獨占して荒れ狂ったあの文化大革命の時期に沈黙を餘儀なくされ、文化大革命後に復権した研究者の全てが、政治の學問に對する支配をよしとして受け入れているとは、私には到底思われないのです。私は河田さんのように現代中國の研究者の業績を丹念にフォローしていないので、残念ながら實例を以て説得することは出来ませんが、假に少數であっても政治の學問支配に對して緊張感を持っている研究者はいると思うし、そのような研究者がいるということを

前提として、「奴隸の言葉」の中に眞實を探ろうと試みるこの方が、現代中國の「知的状況」を説明する上では意味のあることのように、私には思われます。

第三の疑問は、現代中國の「知的状況」と、過去の中國の「知的状況」の關連という問題をめぐるものです。例えば河田さんは次のように書いています。

「ともあれ、『四つの近代化』をスローガンとする政治的要求が、現代中國の學術研究を左右し、影響をあたえ、歴史評價の變化をもたらしているのは明らかである。その意味で、舊體制の中國と同様、今日の鄧小平時代においても中國の歴史研究は政治状況を如實にうつしだす鏡なのだ。

現在、中國の近代化は、『四つの堅持』すなわち社會主義の道、プロレタリア獨裁、共產黨の指導、マルクス・レーニン主義、毛澤東思想の堅持という『四つの基本原則』の枠内での實施が叫ばれている。それは、ちょうど洋務運動が『中體西用』という枠組みのなかで實施されたように……。

だが果たして、その四つの基本原則にとらわれていて、近代化が本當に達成できるのか。洋務運動は中體西用論にとらわれていたがゆえに、成功することなく終わったのだ。」(二三三—二三四頁)

この文章は裏カバーにも印刷されていて、恐らくは河田さんが本書で最も訴えたかったポイントの一つなのでしょう。ただ、決して揚げ足を取るつもりはないのですが、もしも現在の中國の思想状況を清末の思想状況と重ねて理解しようとするなら、洋務よりはむしろ變法の方がレファレントとして適當ではないでしょうか。というの

も、人民公社のように、中國社會主義の精髓と自ら位置づけてきた制度を廢止してまで「富強」を追求しようというのは、清末で言えば明らかに洋務ではなく變法の段階だからです。そして、何故私がこのような一見些細な問題にこだわるかというと、儒教あるいはマルクス・レーニン主義・毛澤東思想の思想枠組に拘束されつつ社會枠組の大規模な改革を強行せざるを得ないところに、清末變法期の思想狀況と現在の思想狀況の共通性があり、更に言えば、まさにその點に、政治と學術の關係をめぐる過去と現在の連續性があるように思われるからです。

儒教とマルクス主義・毛澤東思想という二つの思想體系は、内容においては大きく異なりますが、少なくとも經典を持つ世界解釋の教義體系であること、そして政治體制の正統性根據となつていいることは共通します。つまりそこでは、新しい思想や行動は常に經典の再解釋や讀み換えを通して正統化され、そうした經典の再解釋が場合によつては政治體制の正統性を脅かすということも起こります。ここでは、政治と學術は常に潜在的緊張關係に立ちますが、それは必ずしも政治が學術を支配するという一方的な關係ではありません。體制的安定を目指す政治權力が、經典解釋の獨占を通して學術を支配しようとする傾向を持つことは確かです。しかしこれとは逆に、學術の世界から發する經典の再解釋が政治權力による公式の經典解釋に根本的疑問を投げかけ、むしろ實力行動以上に政治權力を危機に陥れるという關係もまた成立するはずですが、そして、清末の變法段階で起こったのは、まさにそのような事態だったのではないのでしょうか。儒教によつて儒教體制の改革を正統化するということはそもそも大きな矛盾をはらんでいます、その矛盾をはらんだ要

請の中から康有爲學のような儒教の根本的再解釋が生まれ、そのような儒教の根本的再解釋が儒教の全面否定の一つの前提を作ったと私は考えています。河田さんの指摘するように、「四つの堅持」と「四つの現代化」の間にも大きな矛盾が存在することは事實です。しかし、ひょっとしたらその矛盾を逆手に取る形で、新たな思想の地平が開けるのかもしれない。そのような可能性こそ、河田さんには是非見つけて欲しいと思っています。

最後の疑問は、アメリカにおける中國研究の分析方法をめぐることです。これまで述べてきたように河田さんは、「政治と學術」という枠組を通して、現代中國における中國研究の知的狀況を分析していますが、この枠組はアメリカにおける中國研究の知的狀況を分析する際には影を潜めてしまい、むしろ研究者のタイプや世代の問題が重視されています(三三〇頁)。どうして河田さんは、同じ「政治と學術」という枠組を通して、アメリカの中國研究にアプローチしなかったのでしょうか。というのも、アメリカの中國研究も、中國の中國研究と異なる形ではありますが、同様に政治の強い拘束を受けた歴史を持つからです。

河田さんも指摘しているように、アメリカにおける中國研究が本格的に開始されたのは、第二次世界大戦後のことです。ところが、まさにその門出の段階で、アメリカの中國研究は強い政治的壓迫を受けました。言うまでもなく、五〇年代前半のアメリカを襲ったマッカーシー旋風です。マッカーシー旋風の背景には、一九四九年の中華人民共和國の成立、つまりアメリカから見て「中國の喪失」という事態がありましたから、マッカーシー旋風の主要な標的となつたのは、オーエン・ラティモアやフェアバンクのような中國研究者

であり、あるいはジョン・デービスのような國務省の中國専門家であり、さらにはインステイテュート・オブ・パシフィック・アフェアーズのような中國研究組織でした。蔣介石を批判し中國共產黨に理解を示した彼等は、「中國を共產主義者に賣りわたした赤の手先」として弾劾され、多くは社會的に葬り去られました。

アメリカの中國研究が再び活性化したのは、一九六〇年代に入つてです。既にソ連との間には緊張緩和が進み、今や中國はアメリカにとつて最も「危険な」存在となつていました。その「危険な」中國の實態を説明するために多くの資金が中國研究に投じられ、中國研究が急速に進展したのは何とも皮肉な事態でしたが、マッカーシー旋風の反動として、當時のアメリカの中國研究は、社會科學的方法の導入による學問の中立性を看板に、學問と政治の分離を唄つていました。そして、進行しつつあるベトナム戰爭に對しても、個人としてはともかく、中國研究者としては沈黙を守つたのです。

ところが、六〇年代における中國研究の擴大の中から生み出されつつあった若い世代の中國研究者が、この事態に對し強く反發しました。彼等は、ベトナム戰爭を引き起こした原因の一つはアメリカの從來の誤つた中國觀・アジア觀にあると考え、そのような從來の見方を批判し、かつベトナム戰爭に反對することは、まさに中國研究者の責任であると主張したのです。彼等は一方において積極的に政治活動を展開すると共に、他方では學問の領域で、帝國主義の問題を重視しつつ中國近代史の根本的書き換えを目指しました。こうした若い世代の矢面に立たされたのが、かつてマッカーシー旋風の標的となつたフェアバンク等のリベラルであつたことは、皮肉と言ふよりは悲劇と言つた方が適當かもしれません。つけ加えれば、ベ

トナム戰爭に反對した若い世代の多くは、中國の文化大革命に共感を寄せていましたから、文化大革命が挫折した時、彼等もまた深い挫折感を味わつたわけです。

長々と書いてしまいましたが、私の言いたいことは、「政治と學術」をめぐる深刻なドラマが、中國研究を舞臺にして、中國のみならずアメリカにおいても繰り廣げられていたのだということです。そこには、中國研究のあり方だけでなく、むしろ政治と學術の關係のあり方をめぐる問題が、縮圖的に現れているようにも思われます。ですから、もしも河田さんが中國の中國研究を分析したのと同じ視角と手法を使ってアメリカの中國研究を分析していれば、單に中國とアメリカの比較にとどまらぬ、場合によっては我々日本人中國研究者の置かれた「知的狀況」の反省を促すような、貴重な洞察がそこに生まれたのではないのでしょうか。

與えられた紙數も盡きようとしています。私は、私が河田さんに投げかけた問いが、そのまま自分に返ってくることを十分覺悟しています。私自身明確な解答を用意して發した問いではありませんから、それは私にとつても今後の解くべき課題です。河田さんとの共同作業を通してこれらの問題を解くことが出来たら、お互いに思いもよらぬ成果が結果するかもしれません。そうなれば、書評を引き受け、敢えて憎まれ口をたたいたことにも積極的意味があるというものです。

一九八七年四月 東京 研文出版
四六判三六八頁 二四〇〇圓